チョウ保護へ木移植

平成12年4月28日、普代小3年の19人と鳥茂渡小の全校児童17人が、チョウセンアカシジミの会代表の尾形さんの指導を受け、卵が付いているデワノトネリコの木をそれぞれの学校の周りに植えました。（右ページ写真上）7月にチョウになって舞うまでの過程を観察し、チョウへの関心を高め、みんなで守り育てていこうという意識を高めることが目的でした。

同年5月26日には一回目の幼虫の観察会、6月29日にはさなぎの観察会も行われ、子どもたちは初めて見る幼虫やさなぎに感動しました。

念願の成虫観察会

同年7月11日、子どもたちの念願だった成虫（チョウ）の観察会が上区の普代川沿いで行われました。

子どもたちは、尾形さんの指導でじっくり観察。デワノトネリコの木で羽を休めているオレンジ色のチョウを見つけると「いた、いた」と歓声を上げ、恐る恐る近づいてみたり、その姿をスケッチしていました。（右ページ写真中）チョウを守る活動を通してチョウセンアカシジミは、子どもたちの心の中で、次第に身近なものになっていったのです。

卵の数減 でも活動継続

その年の11月に村教育委員会と普代小、鳥茂渡小の両校で産卵数の調査を行いました。普代小は上区の普代川沿い、鳥茂渡小は同校の周辺を調査しました。デワノトネリコの幹に生み付けられた卵を虫眼鏡で観察し、数をノートにメモしました。（右ページ写真下）

そして、村全体の卵の集計が出ました。結果は、子どもたちの保護活動もむなしく、前年の約7割も減っていました。尾形さんは「自然淘汰や産卵時期の夏場の天候不順が影響したのでは」と残念そうに話していましたが、「天候が良くなれば元に戻るパワーを持っているチョウなので、これにめげず、子どもたちには頑張ってほしいです」と励ましてくれました。

子どもたちはチョウを守る活動を一生懸命続けてきましたが、直接産卵数の増加にはつながりませんでした。でも、それからも、両校での活動は地道に続けられ、15年、16年と保護活動を進めた上普代と芦生では、着実に卵が増えていきました。子どもたちの活動がチョウに伝わったのです。

乱舞するチョウに歓喜

金子英雄さん（芦生・62歳）

以前は裏庭にあったデワノトネリコの木も草ぼうぼうで、ジャングルのようでした。鳥茂渡小で12年に保護活動を始めてから13、14年で徐々にフジや下草を刈ったりして15、16年でやっと整備しました。かなり切ったんですが、今でも200本以上はあります。欲しい人がいたらなんぼでもどうぞー。

刈り払いしたら日当たりもよくなって、やっとチョウが卵を産んでくれました。12年には卵が50個しかなかったども、16年には1193個にもなりました。

去年の7月には、お昼過ぎに家から見だら、こっちがらも、あっちがらもチョウが飛んでんだものー。酔っぱらいのようにひらひらど。そんとぎはうれしがったねー。今年も楽しみだねー。

保護の活動を続けます

1年生から保護活動をしている
佐藤　旭くん
（鳥茂渡小6年）

僕は1年生のときから、チョウの保護活動を始めました。金子英雄さんの家からデワノトネリコを譲ってもらって、学校の周りに植えました。金子さんの裏でも幼虫やさなぎ、成虫の観察会をしました。これからも学校の周りにたくさんチョウがこれるよう活動を続けます。

とってもかわいかった

去年の観察会に参加した
茂石祐次さん
祐香さん・美香さん
（旭日区・31歳、8歳、31歳）

去年の成虫観察会で初めてチョウを見ました。とってもかわいかったです。もうちょっとで産卵するところを見れそうだったんですが…。去年は卵がたくさんあったので、今年こそは産卵シーンを見たいと思います。一度チョウを見たらなんか愛着がわいてきましたね。